

令和6年8月

景

月

あ お ぞ ら

鹿屋市青少年育成センター

鹿屋市 共栄町 20-1 TEL 31-1138
(鹿屋市教育委員会 生涯学習課)

「気遣い、気遣われる支え合いの心の大切さ」

鹿屋市立上小原小学校 校長 赤井 清人

4年前の令和2年夏、新型コロナウイルス感染症に関して、全国の発症状況や感染者への誹謗中傷、差別的な扱い等の問題が、連日のように報道されていました。当時私は奄美大島の小学校に勤務していました。多数の感染者が出た奄美諸島の一つの島の町の様子が、新聞で伝えられているのを目にしました。8月初旬までに55人が感染し、それ以来新たな感染者がいない中、退院して不安を抱えて帰島する方々を、「お帰りなさい。」「元気になってよかったね。」と気遣い、温かく迎えているという内容でした。クラスターが発生したその町で、感染者への中傷や差別的な扱いが大きな問題にならなかったのはなぜか、私はおおよその考えを持ちながら新聞を読み進めました。奄美の文化や社会を研究する専門家や感染症に関する差別問題等を調査する研究者は、「結びつきが強く互いに配慮し気遣う土壌が、感染者を支える姿勢につながったのではないか。」「感染者の情報を共有したことで正しく恐れ、サポートするムードが生まれた。」と分析していました。なるほど、やはりそうなんだ、と実感しました。知らず知らずに感染してしまい、自分の健康に不安をもちながら人目を気にしなければならない二重の苦悩を抱えた人々を結いの精神で支えたことに、同じ奄美で生きる者として誇りさえ感じることでした。

また、今から14年前の平成22年10月、奄美は未曾有の水害に見舞われました。私は当時鹿児島市の学校に勤務しており、離れた場所からただただ島の人々の無事と復興を祈ることしかできませんでした。その時も、多くの場面で島の人々の結びつきの強さを感じたのを記憶しています。

それからさらにその4年前の平成18年7月には、県北部豪雨災害がありました。その時私は、始良地区の小学校に教頭として勤務しており、夏休みに入ったばかりの学校が水害に遭い校舎内の

あらゆるものが水没し復旧に苦慮しました。近隣の小中学生やその引率の先生方をはじめ、県内外から多くのボランティアの方々が駆けつけてくださいました。報道番組の取材クルーの皆さんも泊まり込みで復旧を支援してくださり、被害に遭った私たちのことを自分のことのように受け止め、無償の施しをされる姿に感銘するばかりでした。

話はかわり、先日、私が校庭の草刈りをしていたときのことです。運動場で汗びっしょりになって遊んでいる子どもたちに、私が「水分をしっかり取りなさいよ。」と声をかけました。すると、「校長先生もだよ。気を付けてください。」と返事が返ってきました。毎朝の登校時の子どもたちに「今日も楽しいことがあるかな？」と尋ねると、授業のことや昼休みの遊びのことなどを話し、そのあとに、よく「校長先生は？」と尋ね返してくれます。朝の一日のスタートから、とても幸せな気持ちになります。

古今東西、人と人が気遣い、気遣われ、支え助け合いの心でつながることは、何より大切だと信じています。また、正しい情報をプライバシーに配慮し正しく伝え合い、人と人がつながって困難に立ち向かうことが求められている時だと痛感しています。

今後も、子どもたちの心身ともに健やかな成長を目指し、何よりも豊かな心を育むことに努めていきたいです。皆様の御理解と御協力をお願いいたします。

